

# 宋拓集王聖教序について

中田 勇次郎

27 (中田)

大谷大學の禿庵文庫に所藏されている法帖には、清の翁方綱舊藏の宋拓化度寺碑や何紹基舊藏の宋拓信行禪師碑があり、これらについてはかつて本學報において研究を發表したとおりであるが、當文庫にはこのほかにまだいくつかの名品がある。その一つに、中國における行書の碑の無上の神品とされている集王聖教序の宋拓本がある。これについてもかねてから調査して見たいと思つていた。ただ、聖教序の宋拓本は信行禪師碑のような天下の孤本とよばれるものではなく、わが國にも十數本が傳存している。ちかごろ、この碑の宋拓本を六本ばかりの鑑賞することができた。それに當文庫の一本および景印本などによつて紹介されているものを併せるとほぼ十本を比較對照することができた。そこでこの碑の成立や鑑賞の歴史や方法および拓本の種類などの諸方面について

考究したところをまとめて述べて見たい。

集王聖教序は正しくは大唐三藏聖教序と呼ぶべきもので、その碑文の内容は、唐の太宗文皇帝が玄奘法師の新譯の經典のために製した大唐三藏聖教序と、おなじく唐の太宗が玄奘法師の謝表に對して答えた手勅と、そのときの皇太子、のちの唐の高宗の製した述三藏聖記と、おなじく唐の高宗が玄奘法師の謝表に對して答えた手勅、および玄奘法師の翻譯した般若波羅曷多心經からなつてゐる。碑文の文字は弘福寺の沙門懷仁が晉の右將軍王羲之の書を集めたものであるから、世に集王聖教序と呼ばれ、褚遂良が書いた雁塔聖教序などと區別されている。文字は文林郎の諸葛神力が石に模勒し、武騎尉の朱靜藏が鐫刻したもので、すべて千九百四字ある。唐の高宗の咸亨三年十二月八日に京城の法侶によつて建立されたも

ので、現在、いわゆる西安の碑林、今の西北歴史博物館に存している。

この碑が刻されたことについては、大慈恩寺三藏法師傳卷七に、唐太宗と高宗の序文がつけられるとまもなく、弘福寺の寺主圓定および京城の僧等が、この二つの序文を金石に鐫刻して、これを寺宇に藏せんことを請うた。帝はこれを許可した。のち、寺僧の懷仁等が晉の右軍將軍王羲之の書を鳩集して碑石に勒した、という。これによつてこの碑がはじめ長安の弘福寺に建立されたものであることがわかる。ところが現存する唐代の記録によると、まず韋述の兩京新記には、興福寺に懷仁が王羲之の書を集めた聖教序に金剛經を附刻した碑のあることが見えている。また、張彥遠の歴代名畫記卷三、記兩京外州寺觀畫壁の條には、千福寺におなじく懷仁の集王聖教序の碑のあつたことが見えている。興福寺の聖教序は二序の後に金剛經を刻しているから、今の般若心經を附刻しているものと同碑であるとは言えない。千福寺の碑もはたして今の碑と同じものであるかよくわからない。従つて、今の碑が原石であるかどうかについても、まだはつきりとした斷定を下すことはできない。原石の碑文は褚遂良の書いた雁塔聖教序のように、太宗と高宗の序記

だけであつたか、あるいはそのうえに太宗と高宗の批答と般若心經のあるものであつたか、または金剛經を附刻した興福寺のものであつたか、これらについてはなお疑問を存しておくよりほかはない。ただ、序記のほかに太宗と高宗の批答および般若心經を刻したことは必ずしもいわれのないことではなく、金剛經にしても同様である。しかし、金剛經には別にまた懷仁が王羲之の書を集字したと伝えられる刻石が現存している。これは唐の唐元序が集字したものであることは宋代の金石の著録に記すところである。これと興福寺のものとの關係も考えられなければならない。

も一つは序記のつけられた貞觀二十二年(六四八)と碑の建立された咸亨三年(六七二)とのあいだに二十五年間のひらきがあることである。これについては、明の郭宗昌の金石史のように、序記がつけられてまもなく懷仁が集字しておいたものを後になつて石に刻したという説と、清の王昶の金石萃編のように、懷仁が王羲之の眞蹟から集字するために苦心を積みかさねて二十五年を費してはじめて完成したという説がある。しかし般若心經の翻譯が出来あがつて于志寧、許敬宗、來濟等に潤色せしめた年を舊唐書卷百九十一玄奘傳によつて顯慶元年

(六五六)とすると、二十五年間という期間はもつと短縮されるわけである。従つて王昶の説は改められなければならない。これについては翁方綱などもすでに注目している(以上、この碑の成立については日比野丈夫氏の集王聖教序の碑について「書道全集新版唐2」を参照されたい)。

懷仁という人の傳記はよくわからない。宋の黃伯思の東觀餘論に周越の古今法書苑を引いているのによると、懷仁は唐の太宗朝の弘福寺の僧侶で、太宗のつくつた聖教序を王羲之の行書を集めて石に刻し、多くの年月を経た完成したといつている。懷仁は書においても名があつたらしく、宣和書譜卷十一に小傳を記し、かれに王羲之の書を集めた行書の聖教序があることを述べ、草書としては臨晉王羲之往還等帖をかかげている。王羲之の草書の尺牘の臨書などでもできた人であることがわかる。宋の桑世昌の蘭亭考卷一に晉の孫綽のつくつた蘭亭詩の後序をあげて、「乾封二年(六六七)十月二十七日、弘福寺沙門懷仁集寫晉王右軍書」とある。これによるとかれは聖教序のほかにも王書の集字を行つているわけである。この眞蹟ほのちに明代にまで傳わつたと見えて、明の董其昌の刻した戲鴻堂法帖に、懷仁の聖教序の眞蹟を刻し

たのちにつづいてこの蘭亭詩後序が刻されている。明代の刻帖のことであるから眞蹟の面目をどれほど傳えているかよくわからないので眞偽のほどは決定できないが、宋代から傳承されたものと考えてよいであろう。もしこれに誤りがないとすれば蘭亭詩後序の集字された乾封二年と、聖教序の刻された咸亨三年とはわずか五年のへだたりであり、およそこのころに懷仁が王書の集字を行つていたとすることはかならずしも不合理ではないと思われる。また、大慈恩寺三藏法師傳に「弘福寺寺主および京城の僧等」とあり、碑文に「京城の法侶が建立した」とあるのは一致する事實と考えられる。また、三藏法師傳に「のち、寺僧の懷仁等が云々」とあるのは、必ずしも直後でなくてもよい表現であり、懷仁一人がやつたのではなく、誰か他の人も手助つたことも考慮に入れるべきであろう。要するに、序記がつくられた貞觀二十二年から二十五年を経て完成したということについては、以上のような事情から考えても、ありえないことではないと思われ。

懷仁が王羲之の行書の材料としてもちいたのは、唐の王室の内府に所藏されていた多數の眞蹟であつたことはほぼ誤りがなからう。かれがそれを借りて摹寫をし

たのはもちろん一年二年では十分ではなかつたであろうが、大體は高宗朝においてであろう。現存する王書から考えると、この材料になつたものの筆頭にかかざるべきものは蘭亭序であろう。これについては清の翁方綱がその著書の蘇米齋蘭亭考の唐沙門懷仁集聖教序内用蘭亭序の條に詳説している。それによるとこの碑の集字にあつては蘭亭序のテキストの定武本と褚遂良の模本が用いられていることになる。なかでも褚本がもつとも多く用いられているという。このほかに王の尺牘の搨模本としてもつとも信頼することのできるものに喪亂帖と九月十七日帖と奉橋帖がある。この三帖のなかにある文字とその偏傍を碑字に比べて見ると一致するものが少くない。とくに奉橋帖(延光室影印本)の羲之白不審以下五行は一字ごとに聖教序と符合するといつてもよいほどで、この帖などは明らかに集字の材料として用いられたものに相違ないであろう。これ以外に法帖に刻されたもので王の尺牘の現存するものは二百帖あまりあるが、その中から十七帖や澄清堂帖のような草書のもののをぞいて、行草の書體でかいたものの中には聖教序と一致するものがある。例えば淳化閣帖や快雪堂帖に刻されといふ毒熱帖、自慰帖、足下家帖、極寒帖、建安帖、追尋帖などは

刻の良否はともかくとして、喪亂帖なども同種のもので、聖教序の字體と通ずるものが少くない。およそ行草の體でかかれた王書の尺牘からは隨處に聖教序と符合するものを求めることができる。しかし、法帖に刻されたものは多くは字形がくずれているので、むしろ聖教序の方に純粹なすがたが見られる。聖教序に喪亂帖、九月十七日帖、奉橋帖などのような王書の眞相を傳えた搨模本に共通する筆意があることは、これが唐の内府に收藏された王書の眞蹟から直接模寫して取られたものであることを示すもので、この碑の價值はこの點において決して低く評價されてはならないと思われる。

碑文の字數はすべて三十行、毎行八十數字で、千九百四字ある。その中には同じ文字が重出している。例えば之字は五十三字、而、無字は三十九字、不字は二十四字、以、於字は二十字、其字十八字、法字は十七字、是字十六字、三字は十五字、文字は十三字、所字十一字、心、流、道字は九字あり、これ以下二字三字のものに及んでゐる。これらの重出したものをのぞくとおよそ七百六十字になる。重出する文字は同じ字體のものを一様に反覆するのではなく、多くは數種の字體を混用している。それを勘定に入れても大體八百字程度の文字を集めたので

あつて、千字文のことを思へばもつと少ないわけである。この程度の字數ならば王書から集めることは材料さえあればそれほど至難であるとは思われない。ことに千字文などがすでに行われていたと思われる當時にあつては、ほぼ基礎的なものはあるいは懐仁でなくても準備されていたかもしれない。結局この碑の集字の困難さは内府に所藏された眞蹟から一字々々嚴正に選擇されて行つたところにあるのではないかと思われる。

清の翁方綱はこの懐仁の集字を鑒眞と存摹と存疑の三種に分つた。鑒眞は王の眞蹟として疑いのないもの、存摹は眞蹟から出たものではあるが懐仁が集めるときに自分の意を加えたもの、存疑は内府から借りた眞蹟を鈎摹しました上石するときに書手の筆勢が混つたものをさす。おそらくこの程度の誤差はあつたであろうが、概して眞蹟からきわめて忠實に鈎摹し上石したものであることは十分認められる。ところが明の董其昌はこれを王書の集字としないで懐仁の自運の書であるという説を立てているが、これは正しいとは思われない。以上の點から考えても、この碑はおそらく懐仁の在世中に、かれの意志をよく反映して刻されたものであろうと推定される。従つて現存の碑を原石であるとしてもその實質が劣るとは考え

られない。

この碑が建立されてから、唐代においては一時王書を集字した碑が流行する。開元九年十月のころに興福寺の僧大雅が王羲之の書を集めて刻した今のいわゆる興福寺半截碑はその代表的な名品である。この碑の書法は、聖教序よりも五十年ほど後のものであるせいも、よく整理されて聖教序のような生々しさはなく、熟練した美しさを見せている。このほかにも聖教序に倣つた集王の碑は一々毎擧に暇がないほど多く、その風習が遠く朝鮮の碑にまでも及んでいることは人の知るところである。

集字の碑が流行したばかりではなく、聖教序の書風がまた一部に行われた。清の錢泳の履園叢話に次のように言つている。唐代の書風は大曆以前は主として歐陽詢、虞世南を學んだが、大曆以後は顔眞卿、李邕を學ぶものが多くなつてきた。大中、咸通のころには徐浩、蘇靈芝および聖教序を學ぶものが多くなり、それがのちのいわゆる院體となり、歐虞の風はすたれという。この説は大體のところ當を得ていると思われる。天寶から大曆にかけては政治上から言つても一つの轉換期であつたやうに、書の上から見ても革新の行われた時期である。楷書においては顔が出て歐虞を一變した。草書では張旭と懷

素が出て、率意を主んじて自由奔放な狂草を書いた。初唐以來の王羲之尊重の風が次第に崩壊して、新しい書風に切り換えられて行きつつあつた。この時において李邕は行書を得意とし、聖教序から出てその上にさらに生妙な空気を吹きこんで一時大いに流行した。おなじじころの蘇靈芝になるとおなじく聖教序を學んだのであるが、李邕の生新さはなかつた。宋の歐陽脩はかれを唐の寫經に寫經生があるように、碑における碑字手であるといつてその因襲生をそしている。降つて徳宗朝の建中、貞元年間に吳通玄、通微兄弟が聖教序を學ぶ。兄弟はともに召されて翰林學士となつたので、かれの書體を翰林院の書體といふので院體と呼んだ。これはむしろ型にはまつた平凡な書という意味で士大夫たちからは輕蔑された。北宋の楊億の談苑に(佩文齋書畫譜卷二)、

翰林學士院では五代からこのかた兵難が相繼ぎ、待詔で正書を習うものはきわめてまれで、院體をもちいて相傳えていた。その字勢は輕弱で、筆體は法がなかつた。すべて詔令、碑刻はみな觀るに足らなかつた。

ところで、宋の太宗は、筆札に心を留めて、即位ののち、書の上手なものを募集して、近くに侍らせることを許可し、御書院を置いた。そのときはじめて蜀人の

王著を得たが、かれは薄官の平役人であつたから、召して御書院祇候とし翰林侍書に昇遷せしめた。かれは草隸をよくし、當時ならぶもののないほどの名手で、時に隋の智永禪師の眞草千字文に數百字闕けたところがあつたのを補寫し石に刻した。それはただ形貌を見るだけで、神妙さはなかつたが、世上ではこれを珍重した。かれは大書をかくのが上手で、その筆は非常に大きく、すべて勁毫を用いてあつた。それを散卓筆と號した。(中略) これからのち内省の筆體が一變し燦然として觀られるようになった。

という。これは唐から五代にかけて、聖教序の書風を受けついで院體の書が流行した弊害を説き、王著が任用されてからはそれが一變したことを述べたものであるが、これによると歐虞の楷書は聖教序風の行書に風靡されて崩壊して行つたと解せられる。この意味から言えば聖教序の書風の流行はかならずしもよい結果をもたらしたとは考えられない。

北宋末に出た黃伯思の東觀餘論の題集逸少書聖教序の條に、近世の翰林侍書の人々は多くこの碑を學んでいるが、いくら學んでもこれほどには書けず、すこしも高い風韻がない。それでその書をば院體と稱している。それ

は唐の吳通微兄弟にすでにこの呼び方があるのによつたものである。だから今の士大夫でこの書を玩ぶものはきわめて少ない。しかし、學んでもこれほど書けないのは、自分が俗なのであつて、碑中の文字は決して俗ではないのであるという。南宋の陳樞の負暄野錄にもこの東觀餘論のことはを引いて、そのうちに、今、中都で誥勅の書き方を習うものは、ことごとく王著の字に倣い小王の書といつている。一に院體というのは翰林院で尙ぶところからいつたのであるという。これらの記事によつて院體の弊害が宋代にまでも推し及ぼしたことがわかるであらう。今、宋人の告身などに時にこの書風の例を見ることができる。例えばわが國に傳存する北宋の司馬光や范純仁の告身などの書風がそれである。

このように宋代において官界の文書に聖教序の書風が行われたけれども、一般の士大夫の間にはあまり喜ばれなかつたらしい。北宋の歐陽脩の集古錄跋尾にもこれは著録されていないし、朱長文の墨池編の碑目にも載せられていない。蘇東坡や黄山谷はもちろんこのような書風を好まなかつたのであらうから、その題跋にもこの碑に及んだものが見當らない。米芾は二王の書を好んだが多くの眞蹟本を主とし、この碑のことを述べた記事がその

著書にはやはり見當らない。ただ、蘇東坡やその門下の秦觀などと交遊のあつた孫覺が、吳興の刺史をしていたとき、郡内の石刻を集めて墨妙亭に陳列した中に、唐太宗御製聖教序のあることが、清の張鑑の編した墨妙亭碑目攷に見えている。碑目攷の釋文によると、これは唐太宗の聖教序だけを刻したものらしく、原文は今の碑と少異があり、その異同を褚遂良の雁塔聖教序と校勘した校記を注している。この碑は醜刻らしいが、これが孫覺の鑑賞したものに誤がないとすれば、北宋においても一部には賞玩するものもあつたことになる。北宋末の黃伯思の東觀餘論に記事のあることは前にも引用したとおりで、黃伯思は聖教序の碑の文字が王羲之の尺牘ときわめてよく似ているといつて、その碑刻のよいところを取りあげている。宣和書譜には懷仁の小傳をかかかけてその作に行書の聖教序の集字の碑があることを記している。趙明誠の金石錄第六百九十八にもこの碑を著録している。これらから考えると北宋末葉のころにはこの碑のことがかなり知られるようになっていたことが想像される。南宋のはじめ、二王の書法に長じた高宗のかいた千字文を見ると、一字々々聖教序に本ずいているようであるから、この碑を學んでいるに相違ない。しかし、概して一

殷の文人の間にはこの書風は喜ばれなかつたらしく、南宋を通じてもつともひろく歓迎されたのはむしろ東坡、山谷、海岳という三家の書風であつたことはすでに人の認めているとおりである。

しかし、宋代の士大夫が王羲之の書を全然排斥していたわけではない。かれらが王の行書として學んだのは蘭亭序であつた。蘇東坡にしても黃山谷にしてもよく蘭亭序を學んでいる。南宋の姜白石にしても王の行書としてもつとも愛したのはこれである。この時代に行われた蘭亭序の模刻の數がおびただしいものであつたことも、そのいかに流行したかをものごたる事實である。も一つ王書について注目しなければならぬのは、宋の太宗の時に刻された淳化祕閣法帖である。その内容は歴代の帝王、名臣、諸家古法帖、王羲之、獻之から成り、王羲之、獻之がその大半を占めている。これがその時代における全集のような役目をはたし、北宋末から南宋になると諸種の翻刻本が續出した。その鐫刻は現存するものから見るとむしろ聖教序よりはるかに劣るものであるが、實際は二王の書は眞蹟本のほかはこのようなものによつて鑑賞されたのである。しかも、この中には二王ばかりではなく他の書の名家をも含めてあるところから、二王

よりもさらにすぐれた書家のあるべきことが新しく認識された。北宋末のころから南宋を通じて、二王よりもむしろ魏の鍾繇を愛好する傾向がいちぢるしくなつてきている。とにかく、蘭亭序と淳化閣帖とその翻刻本が宋代における王書の對象となつたもので、聖教序に關しては、これを大きく取りあげて稱賛した記録や題跋はまだほとんど見當らない。結局、負暄野錄のとくごとく、これは院體の書として一部に行われたに留まるものと考えざるをえない。宋末の趙孟堅の書論にも院體の弊害をとき聖教序の書風を憎んでいる。

元代になるとはじめに趙子昂が出て、ふたたび二王の典型が復活される。今、かれの臨書した聖教序が傳えられているけれども、その眞蹟かどうかは疑わしい。しかし、かれが聖教序を學んだということはその書風から見ても考えられることである。また、虞集にも聖教序の臨本が世に傳わつていふという(楊守敬、平碑記)。おそらく元初にはこの碑が士大夫の間にとりあげられていたであろう。しかし、著録について見ると、盛熙明の法書攷には、辨古の條に王羲之の行書としてあげているのは蘭亭、極寒、毒熱、慈蔭、官奴、晚雪、來禽、奉橘、快雪の九種であつて聖教序はあげられていない。これは、



王羲之には尺牘のよいものが傳わつてゐるから、聖教序などがとくにかえりみられなかつたからであらう。すなわち帖が貴ばれて碑刻のものがかえりみられなかつたのであらう。また、鄭杓の衍極にもこの碑のことにとき及んでいない。そのほか元人の題跋の二三をひらいてみても、まだとくに聖教序を稱賛したものは見當らない。従つて元代では聖教序がどれほどひろく賞玩されていたかどうかはよくわからない。

明代になると、まず菴竹堂碑目卷二に著録されてゐるのがもつとも早いものであらう。清の王澐の論ずるところによると、弘治、正徳年間に士大夫がはじめてふたたびこの碑を重んずるようになり、一本を買ひ求めるのに時としては財布を傾けてもなお入手し難く、已斷のものでもこれを買うのに數十金を要したという。この碑は一説によると天順年間に二つに截斷されたという。それで截斷される前のものを未斷本といつて尊重し、截斷されたからのものは闕字ができたので未斷本に次ぐものとされた。この已斷本さえもきわめて高價であつたことを述べてゐるのである。

弘治、正徳年間の士大夫といへば祝允明、文徵明およびその子弟知友をさすであらう。明の汪珂玉の珊瑚網卷

二十に王世貞の一跋をのせてゐるのによると、右軍の諸帖ではただ聖教序のみが行草の間にあつて、きわめて學習者に役立つものがある。近世では文太史の書法は多くこれから出てゐる。世上では争つてこれを買ひ求めてゐるという。文太史すなわち文徵明の書法が聖教序から出ているという説はなるほどと思われる。清の楊賓の所論碑目にも文徵明の臨本があることを記載してゐる。

王世貞の弇州山人稿にも聖教序のためにかいた數跋がある。それによると、聖教序の書法は百代の模楷である。ただその缺點は、結體に別構がなく、偏傍に假借が多いことである。これは集書したものであるからそうならざるをえないのであるという。この説は集字の碑であるから結體の同じ文字がいくたびもくりかえして出てきたり、偏傍を組みあわせて造字した文字があることを缺點としたのであるが、これを永久に模範とすべき書であることを認めてはゐる。また、集右軍書聖教序心經はわたくしは前後數十本を見たことがあるという。これによつてこの時にはすでに數十本が士大夫の間に流布していたことがわかる。

孫鑑の書畫跋々卷二上、聖教序跋に、この帖は世に行われてゐる法書の第一の石刻である。右軍の眞蹟の世に

存するものはまれである。たとい存していても疑わしいところがある。また、わずかに數字しかないので、賞玩するにもものたりない。ところがこの碑はさいわいにもやや筆意が存している。これはその時に蓄藏されていた右軍の名蹟が非常に多く、また、拘摹するものや鐫刻するものがみな當時の最高の技術を發揮したもので、眞蹟にくらべてもいささかも遺憾がないといつてよい。とい、その書法のすぐれていることをといて、蘭亭序よりも上にあると稱し、今、世間に存しているものは多い。ただ値段さへ惜しまなければ手に入れることは困難ではない。もし手に入らなければ現在の關中の石（この碑は西安の碑林にある）でも、精巧な拓手に拓本をとらせば淳化閣帖の上にあるであろうという。

張丑の清河書畫舫丑字號にも、懷仁集書聖教序の石本は、天下にあまねく、家ごとに、人ごとに學んでいるという。趙嶠の石墨鐫華卷二、唐集右軍聖教序並記に、この碑は百代書法の模楷である。現在ではとりわけ重んじている。拓本をとるものが忙しくて暇もないほどである。そのために風骨も筆法の細部のするどさもみなくなくなつて、ただ形ばかりがのこつている。しかしその筆法はどこことなく尋ねることはできる。自分がかつて舊搨數十

本を見たことがある、という。石墨鐫華が著わされたのはその序文によると萬曆四十六年（一六一八）のことである。このころにはさかんに拓本をとつて、そのために日に日に碑石が漫漶していたことがわかる。おなじく明末の郭宗昌の金石史卷上、唐懷仁集王逸少書聖教序の條に五跋をかかけ、きわめてよくこの碑を推稱し、右軍の石刻の中の第一であるとし、定武蘭亭の諸刻ははるかに及ばないといひ、淳化閣帖や大觀帖もこれに劣ると品第している。そして、その當時の狀況をのべて、この石はただ拓工が日夕、その生活のために拓を打つ音が朝となく夜となく絶えずつづいて、だんだんと石が剝落していく惜しいと思うがどうにもしようがない、という。またかれが平生見たところの舊拓は數十本あるという。これは石墨鐫華に述べるところと同様であつて、明末には流布する拓本も多く、碑石も拓打のために次第に漫漶しつゝあつたことが認められる。

かれの第五跋に未斷の一舊本についてその移補の字、すなわち剪裝するとき他の部分に用いられている拓字を他の拓本から借りて補填した文字が、十八字あることを指摘している。また、三十三の斷文がこの拓本には一つも闕けたものがないという。これによると明末にこのよ

うな剪装をごまかした骨董品のあつたことがわかる。もつとも、このような細工は他の法帖にもしばしば見られるところであるが、今傳わつている聖教序にはとくに多く見うけられる。それがすでに明末において行われていたことがわかる。

明代でも一つ注目すべきことは董其昌の説である。かれは懷仁の聖教序の眞蹟に跋し、それが懷仁が一筆で自書したものであることは疑いないとし、宋の黃伯思が書苑の説に本ずいて、懷仁が王書を集字したといつてゐるのを非難している。そして、この書は陝本（西安碑林にある集王聖教序）にくらべると、とくに姿媚である。唐代においてかれの書は小王の書と稱された。もし懷仁の自運でなければ小王と名づけざるはずはない。わたくしの家に宋舍利塔碑があり、それに王右軍の書を習うとある。集と習とは一致する。自分はこれによつてこの説が正しいと信じてゐるといふ。董は懷仁の書が小王の書と稱されたというが、これは趙孟堅の説に本ずいたのであらう。負暄野錄では小王の書というのは王著のことをさしている。また、集を習と解するのは實際の碑について見れば取るに足らない説である。これについては清の王澐の竹雲題跋や李光暎の觀妙齋藏金石文攷略に董説の誤

であることを駁論していることはここではくわしくはおかない。

清初になると明末の賞玩の餘波を受けて、この碑を愛好する人が相繼いであらわれる。楊賓はその一人で、かれの鐵函齋書跋には五則の跋があり、大瓢偶筆にも聖教序を論じた十數則がある。かれは平生聖教序を酷愛したといつてゐるからよほど好きであつたと見える。そのときの狀況は、世上に贋本が多く未斷の眞本はえがたく、またあつたとしても高價で入手は困難であるといひ、明以來の翻刻本、すなわち秦藩朱敬鑑本、黃六治北京東嶽廟本などについて詳論している。

孫承澤の庚子銷夏記卷六には僧懷仁聖教序一則があり、懷仁の聖教序は右軍の書を集めたもので、宋人はきわめてこれを輕蔑し、院體と呼んでいた。院中の人がこれを習うて誥勅を書いたのであつて、士大夫は學ばなかつた。趙子固（孟堅）は云つてゐる。その中の逸筆は懷仁はどこから取つてきたかわからない。まだ他の書を學ばないのに、先にこれを學ばせてゐるのは、殊に惡むべきである。子固は書學に深いものである。それゆゑにこのように言つてゐるのである。近頃は非常にちがつてきた。この帖の不斷本をまるで寶玉のように大切にしてい

收藏家は學ぶと學ばないにかかわらずみな一本を買いて求めて人に自慢している。そして秦中の士夫がとくにこれが甚しい。金石史を著した人(郭宗昌)が、聖教序は定武蘭亭にくらべるとはるかにすぐれているといつてゐるのは噴飯である。まことにいわゆる夜郎の王が漢の大いことを知らぬようなものである。かれはまだ本當の定武本を見たことがないのである。(中略) 黄長睿(伯思)は云つてゐる。學んでもこれほど書けないのは自分が俗であるからであつて、碑の文字は決して俗ではないのである。一たい、碑の文字が俗でないのにどうして之を學んで俗になることがありえようか。蘭亭を學ぶものにこんなことがあるであらうか。長睿は書學に深いものであつて、これは失言である、という。

王澐の竹雲題跋には十二則の跋がある。その一つに、この本は良常王氏(王澐のこと)の秘玩する聖教序で、有明内府の故物であり、天下の行書の第二であり、吾家の法書の第一であるという。これは嘉靖の初に顧從義に歸したもので文伯仁(五峰)の兩跋があり、ついで王穀祥(酉室)に歸し、文徵明と唐寅等の跋があり、明末に王鐸の所藏となつた。宋本聖教の冠であるという。また余が京に在ること十餘年、見るところの宋揚聖教はすべ

て百十本であるがまだこれに及ぶものはない。まことに聖教中の絶品であるという。王澐はこの碑のことを孫承澤ほどわるくは言つていないけれども、王羲之の行書では蘭亭が第一で聖教はそれに次ぐとする點では一致している。なおかれの虚舟題跋卷三に唐拓の硃砂本で刻石が完成したときの進御本と稱するものをかかげているのは注意すべきである。

要するに宋以來の諸家の論ずるところは、一つはこの書が俗であるか俗でないかの問題であり、それは院體の弊害から生じた見方であると考へられる。も一つは品第にあつて蘭亭より上であるか下であるかの問題であり、これには兩説あるわけである。

ところが乾隆、嘉慶のころに翁方綱が出て、この碑に冷靜な批判を下し、精密な一種の科學的な研究をした。かれはこの碑に用いられている蘭亭の文字を詳細に比較對照した結果、定武本を用いているもの七字、褚本を用いているもの三十七字、二本ともに通すべきもの十四字、すべて五十八字を見出すことができた。こうなると蘭亭と聖教との優劣の問題は、要するに單帖と集字碑の區別の問題に歸着するわけである。そして、蘭亭に用いられていない文字については又別に考えられなければならない

らない。そこで翁は聖教の字を鑿眞と存摹と存疑の三種に分つて觀察したことは上述のとおりである。

そこで結局聖教序の書について考えられることは次のごとくである。一字々々の見方についてはあるいは解釋の相違も生ずるであろうが、原則としてはどうしても翁方綱のような見方が必要であると思われる。おそらくこの碑字のすべてが王書をそのまま忠實に傳えたものではないであろう、その中には意を加えたものも疑わしいものもあると思われる。また、造字したもののあることはすでに認められているとおりであるし、王書に全然ないものは自運よりほかはないであろう。その材料に用いた王書のすべてが眞蹟として疑いのないものばかりであつたかどうかも疑問であるし、集字のために筆勢が中斷されて字間の氣脈が寸斷されている點ではとうてい蘭亭の天然の趣には及ばないであろう。そこでこの碑を鑑賞するには喪亂帖や九月十七日帖のような正しい搨模本を基準にして本來の王書の長所をよくわきまえる必要があると思われる。

また、聖教序の傳本は明清このかたきわめて多數であるから、そのあいだに鑑別をしなければならぬ。まず原石本と鑿刻本との區別をする。原石本については未斷

本と已斷本とがあるから、未斷本をよいとする。未斷本では宋拓本をよいとする。それにつぐのは舊拓本である。宋拓本では北宋と南宋とあり、もちろん北宋拓をよいとする。時には唐拓と呼ばれるものもあるが、實際上では北宋がもつとも古いであろう。拓本はすべて剪装して法帖に仕立てられている。宋拓といつても、宋代では士大夫のあいだに喜ばれなかつたものであるから、宋代の原装のものはおそらくきわめてまれであろう。宋拓といつても多くは古くても明代に改裝されているであろう。現在傳わつているものでは明の内府に收藏されていたものや士大夫の所藏していたものが比較的古く、それより以前のものは知らない。しいていえば宋代ではあまり喜ばれなかつたにもかかわらず後世宋拓と呼ばれているものがあまり多すぎるくらいがある。そこで拓本の墨色や拓法、入墨の有無、移補の文字などについて新舊と眞偽の辨別をしなければならぬ。このような鑑別の方法は翁方綱のころから次第に精密になつてきて、碑字の一一についてその洶損した痕跡を細部にわたつて比較研究するようになり、特定の文字の漫漶の仕方によつてその拓本の時代が推定されるようになった。例えば吳榮光舊藏の一本が芦屋の黒川古文化研究所に收藏されている

が、これには吳榮光がみずから特定の文字の漫漶の仕方について北宋と南宋の辨別を明らかにした頭注を書き入れている。

清末になると崇恩がこの碑を愛する。かれはみずからその書齋を七佛同龕之室と稱し、はじめに七本の聖教序の善拓を所藏していた。それは(1)墨皇本、(2)寶巖本、(3)牛氏空山堂本、(4)紀文達公(昀)本、(5)郭萬象本、(6)錢士升本、(7)榕城周氏本である。(1)(2)は孫文靖の舊藏で、墨皇本は北宋初搨のもつとも精善なものでかれの聖教の第一本としたもので、これの影印本が流布している。(3)の牛氏空山堂本は清初の牛運震の舊藏本で墨皇本に次ぐ聖教第二本と稱していたもの、この本はわが國に渡來し中村準作氏の所藏に歸し、今なお中村家にある。(7)の榕城周氏本は清の周貽徽の舊藏で、崇恩の一跋にはかれの所藏する七本の中の第一品と稱しているほどのもので、これもまたなかなかの精拓である。現在三井家にある。のちにかれはついに十一本の聖教序を愛藏し、清末における聖教序の蒐藏家の第一にあげられている。清代において聖教序を鑑賞した人はまだこの他にも多くを數えることができるし、題跋の數もまた少くないが、崇恩のころには王書としての品評もほぼ安定し、北宋初搨

本という鑑定の基準も立てられて、その眞價がどこにあるかということも一般に認められるようになったということができであろう。

以上のべてきたように中國においては明以來この碑の宋拓はきわめて得がたい貴重なものとして鑑賞されてきたのであるが、一方、わが國においては何時ごろからまたどのように鑑賞されたかを一瞥しよう。この宋拓本はじめて紹介されたのは、明治四十四年、上野有竹居所藏の本が博文堂から影印されたのがはじめてであると言われる。これには羅振玉、内藤湖南、日下東作の三家の跋がある。ついで大正二年に、黒川氏飛香館所藏の本がまた影印された。吳榮光の舊藏本で、宋徽興、姜宸英、蔡之定、何紹業、吳榮光、翁方綱、葉志詵、羅天池、羅振玉、内藤湖南の諸家の跋がある。吳榮光が碑字の漫漶した部分を鑑別して北宋拓としたものである。これと相前後して西東書房發行の書苑第二卷五號以下に中村不折氏藏の北宋拓不完本聖教序並完本聖教序二種が紹介された。昭和二年には中村不折氏の清の張燿舊藏の一本が西東書房から影印されている。昭和十四年十月刊の三省堂の書苑の特輯集王聖教序號には宋拓の一精本を掲載し、その記事には三井家や高島槐安、吉田苞竹諸氏の宋拓を

紹介した。このほか京都の藤井氏有隣館所蔵の二本があり、その一本は明の王鐸の舊藏本で、王澐の竹雲題跋にいうところの明の内府の故物で、ちに王鐸に歸した一本がこれに當るのではないかと、いう説もあり、また、羅振玉の跋にはその氈蠟の精は唐拓の唐太宗の温泉銘につくものであると激賞している。漫泐の文字は北宋拓として、はもつとも良好で、飛香館本とよく似たところがある。も一本は清の沈鳳（凡民）の舊藏で南宋拓と思われる。

禿庵文庫所蔵の本もまた世に紹介されたことのない善拓の一つである。外簽は王澐が「聖教序宋本」と題している。帖首に沈鳳の「龍跳虎臥」の四字の篆題がある。後に王澐の二跋と沈鳳の跋があり、二家の收藏品であつたことがわかる。王の跋は竹雲題跋に見えるものと文に多少異同がある。拓は古香愛すべく、入墨もきわめて少なく、文字の漫泐したところを調べて見ると南宋拓としてもかなりよい方に屬するもので、ことに裱装が王澐の所藏した當時のそのままで、商賈の手をへて修整されたような俗氣もなく、その清純さはもつともこのまじい。この意味ではわたくしの觀た宋拓の中ではもつとも品格の高いもののように思われる。

わが國に宋拓の聖教序が十數本もあるということは、これが入手しやすいということでは決してなく、辛亥革命のときに名家から流出したことや、とくに好事の人々が愛藏したからであつて、この碑の貴さは中國における貴さとはいささかも變りはない。とりわけ、書は王羲之、文は唐の太宗が玄奘法師のためにしたためたものという内容からいつても、これがいかに貴ばれるべきものであるかは、いまさらとくまでもないであらう。